

がん化学療法科 ニュースレター

ほほえみ 第122号



新年、おめでとうございます。2020年は新型コロナ肺炎で終始した一年間でした。東京オリンピックも延期され、マスク生活を余儀なくされ、外食や旅行は実質的に難しく、生活が大きく変わりました。年があけても、当面、新型コロナ肺炎への注意は必要な状況ですが、予想より遥かに早くワクチン開発が進んだこともあり、今年は明るい兆しが見えてくるのではないかと考えています。ほほえみでも、日常的なことを振り返りながら、トピックを発信し続けられたらと考えております。今年も、よろしく願い申し上げます。

ヴァガバッド・ギター

この本はインドの大叙事詩、聖伝であり、マハーバーラタの第六巻の一部のを取り挙げて、ヴァガバッド・ギター(ギター)と言います。マハーバーラタは、バラタ民族の物語らしいの意味で、日本で言えば古事記のようなものですが、ギターは物語でありながら非常に哲学的です。主な登場人物は、アルジュナとクリシュナです。アルジュナはパーンダヴァの王子で伝説の戦士であり、クリシュナは話の中では、アルジュナを助ける従者ですが、真の姿は強大な神が人の形を借りたものです。

バラタ民族を二分する大合戦、クルークシェートラの戦いの直前の場面設定ですが、この大合戦が起こると、双方、多くの者が失われることが推測され、戦う前からアルジュナは、「夏草や兵どもが夢の跡」、諸行無常を感じて悲しみに耽ります。軍勢的には相手方が優勢ですが、アルジュナにはクリシュナという全能の味方がいるので、アルジュナが本気で戦えば、打ち克つことができるでしょう。この戦いの行方がわかるだけに、戦いたくないのです。クリシュナは、戦うことをためらうアルジュナに、戦うように指示します。戦うことを運命づけられたアルジュナが、自らの存在を肯定できるのは戦うことのみですが、自らの意志に反して、何故、戦うのか。この問いは、非常に哲学的な問いであると言えます。この問いに答えることは簡単ではなく、アルジュナとクリシュナの対話が続いていくのですが、この対話の中でヨーガについて語られます。

詳細は、稀代のサンスクリット学者、上村勝彦先生がサンスクリットから日本語に直訳したものが手軽に文庫で手に入るのを読んでいただければと思いますが、私の理解の範囲で申し上げますと、ヨーガは平等の境地であり、自分の意志で行為することは、正しいとは言えないということに尽きるかと思われます。それでは、自分の意志ではなく行為するとは、どういうことなのでしょう。

行為のそのものに専心し、結果を求めない。
自分の意志を捨て去って、神の意志と一体化する。

この平等の境地＝ヨーガを習得することが語られます。すなわち、究極の姿は、信愛のヨーガ、行為を神に捧げることとなるかと思われます。アルジュナはすぐには、このことを信じませんが、アルジュナ自身や、世の中のすべてのものも、クリシュナ＝時というものが生み、そして、滅することを知り、自己の下す正邪の判断を超えて、クリシュナに従うことを決めるのです。

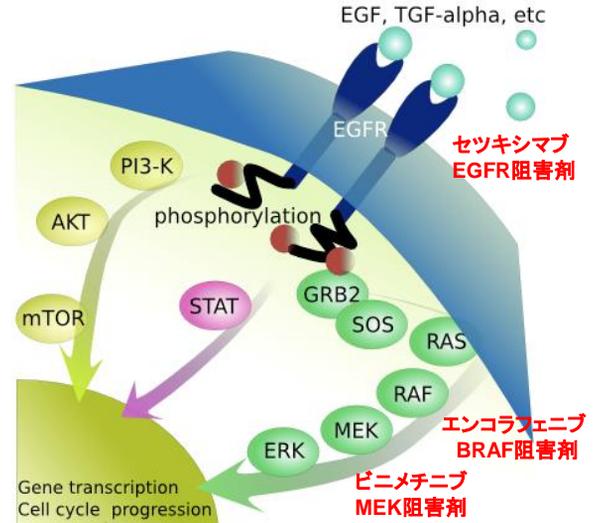
ギターが、日本で言えば、縄文から弥生時代と同時期に成立していることは、純粋な驚きです。



BRAF遺伝子変異陽性の大腸がんに対する ビニメチニブ、エンコラフェニブの承認

大腸がんに稀に認められる遺伝子変異にBRAF変異があります。この変異に対する分子標的阻害剤も開発されましたが、単独では効果が得られませんでした。今回、BRAF阻害剤であるエンコラフェニブに、セツキシマブないしはセツキシマブ、ビニメチニブを併用した2剤ないしは3剤の併用療法が承認されました。

承認されてから実際に使われるまでには暫くかかると思いますが、従来、BRAF変異を有する大腸がんでは一次治療で、抗がん剤3剤を使用するレジメンが多く使われてきたため、二次治療で使える薬剤が乏しいという問題がありました。今回の承認は、この問題を解消するものと期待されています。



Wikipediaより引用(一部改変)

焼き芋

お正月はお節料理が定番ですが、1月3日となるとそろそろ、ちょっと違ったものも食べたくなくて、昨年収穫したサツマイモを焼いてみました。

アウトドア用に買ってある、ステンレス・ダッチオーブンはコンロでも使用可能であり、30分ぐらいで焼き芋の香りが漂い、一時間程度で中までとろとろによく焼けていました。

小さい芋でも、味はまったく遜色なく、むしろ、おやつにはちょうど良いようですね。



MEMO

1月のがん化学療法科の予定

1月1日	元日
1月5日	診療応援(平出先生)
1月11日	成人の日
1月12日	診療応援(工藤先生)
1月19日	診療応援(平出先生)
1月26日	診療応援(工藤先生)

